

人と自然がつながる町で。

ゼロから始めたワークキャンプ



強制されるわけでもなく、自然とみんなが主役になって、このプロジェクトにとりこんでいた。そう、今後続いていく活動になった。これ、ほんとすごい。この土地や仲間が好きにならないとできないこと。

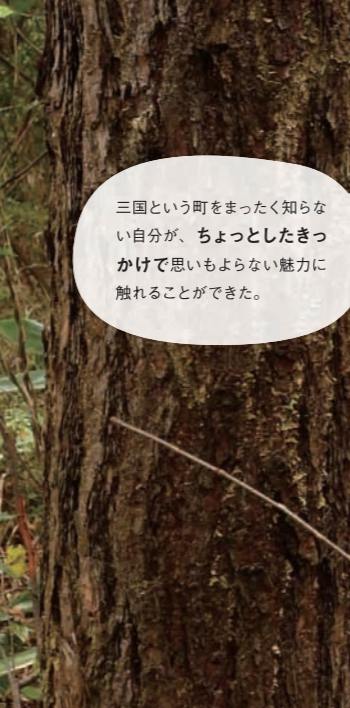
その日は澄み切った青空がどこまでも広がっていた。秋も深まりゆく11月。県内外から6名の参加者を募り、森づくりのプロフェッショナルを講師に招いて、2泊3日で開催された第1回里山保全・森づくり人材養成講座。里山保全・森づくりの基礎知識・技術の習得と実践と、地域に貢献するボランティア活動のあり方をめぐるワークショップ。「実践」×「ワークショップ」の両輪で持続可能な活動のしくみをつくるのが、この講座の目指すもの。

戸を掘り、電気を通し、三国で開拓農業を始めた山崎さんの、みどりレールの思いを聞いた。自分がゼロになったとき、果たして何ができるだろうか。胸が熱くなった。車はフィールドに向う。それまで全く知らなかったマツ枯れ。予想をはるかに越えて荒れていた。どこからか森にゴミを不法投棄していく人が増えたという。森のかたちは光を求める植物で決められてるんだ。下刈や間伐など一つ一つの作業が説明されながら、実技講習が始まる。初めて触れるチェーンソー。エンジンのかけ方を教わり、木の倒れる方向を見極める。その眼差しは真剣そのもの。枯れマツが倒れる手ごたえ。森に関わっている実感。想像以上に楽しい作業だ。自分たちの手が加わって、マツ枯れの森が姿を変えていく。夕日が指したフィールドに、あたたかな感触が残る。将来の森を見に来たいと思った。

作業を終えると、ワークショップがスタート。3日間を通じて、3月に実施する同じ講座のプログラムを「ゼロから立案する」という課題が設定された。「多くの人に参加したいと思うプログラムとは？」「どのような仕組み・仕掛けが必要だろうか？」。限られた時間の中で、アイデアを出し合い、検討を繰り返して、議論が深まっていく。現在進行形でプロジェクトが生まれている。ワクワクした時間が流れている。今朝初めて顔を合わせたばかりなのに、ひとつの熱気に包まれていく。みんなの菌車が、ぐっと動き出した。夕食はみんなで自炊。今夜のメニューは鍋に決めた。買出しに10分も走れば、そこは九頭竜川の河口、日本海への入口。町屋が軒を連ね、ゆったりとした時間が流れている。湊町ならではの風情を感じながらの街中散策、食べ歩きもできる。早くも明日の昼休憩が楽しみだ。空腹にしみる食材は、全部地元でとれたもの。地元の方も加わって、アツアツの鍋に会話が弾み、顔がほころぶ。夜が深まるにつれ、3日間の短さを感じていた。地域を愛する人がいる。その地を訪れる人がいる。人と自然がつながる町で、ゼロから学び、つくりあげた3日間は、これからも続いて行く。

第1回目となる
里山保全・森づくり人材養成講座
テーマは「実践」×「ワークショップ」

このプロジェクトのよさは、汗を流して、参加者のみんなと体験を共有することだけでなく、地域に実際にある問題の解決にとりこんでいること。



プロジェクトに携わる人たちが、「きっとできるはず」と思っているのが心に触れた。ボランティアの可能性を信じてるっていうのかな。

下刈、チョー楽しい!

三国という町をまったく知らない自分が、ちょっとしたきっかけで思いもよらない魅力に触れることができた。

原生林が残る雄島、日本海、越前おろしそば、三国パーガー。普通に観光に来てもいい場所が、ワーク地のすぐそばにある。ワーク前に観光って、新しくおもしろい。そして、夜は温泉が盛りだくさんでした。

地元としては、すぐに使える技術習得が嬉しい。

早朝の原生林は、本当に清々しくて、気持ちいい。雄島、また行きたいな。

興味はあっても実際に関わることができなかった森づくり。一歩踏み出すことができた。